



## 患者は自分の病気に向き合い 医師と協働して治療を

第四十六回 福腎協大会開催

五月六日(日)十時三十分から久留米市の久留米シティプラザ三階久留米座におきまして、福岡県腎臓病患者連絡協議会(以下福腎協)主催の「第四十六回福腎協大会」が開催されました。

今回は、久留米座に来賓をはじめ、会員と家族、医療関係者など総勢二九四名の参加者が集まりました。

初めに、福腎協の森満義彦新会長からの主催者挨拶がありました。

引き続き、十四年間会長を務められた塩屋利且前会長に感謝状が贈られました。

続いて、来賓として福岡県透析医会の高井英俊会長をはじめ、久留米市長代理で健康福祉部長が来られ、福岡県がん疾患対策課長、全腎協の馬場会長や透析施設の先生方から祝辞をいただきました。

次に、透析導入満二十年を迎えられた患者さんへの記念品贈呈がありました。その後、記念講演に入りました。



福腎協会長に就任された  
森満 義彦会長

今回は、認定NPO法人 ささえあい医療人権センター COML(コムル)の山口



第46回 福腎協大会の様子  
(写真提供 福腎協より)

## 「はしか」急拡大！病院でも要注意！

三月以降の「はしか」の感染者は、沖縄県の九十人をはじめ、全国で一二〇人以上に拡大し、福岡県でも九人が感染しています。

「はしか」は空気感染します。

同じ教室内や電車の車両、さらに空調が同じだと隣の部屋にいてもうつる可能性があります。

飛沫感染のインフルエンザなどとは異なり、「はしか」はマスクや手洗いをしても

育子理事長に「賢い患者になりましょう！」と題して話していただきました。

山口理事長は「患者は自分の病気に向き合い、お医者さんと協働して治療を行ないましょう」と話され、医療現場とコミュニケーションをとることの大切さも

## 力を合わせた「共生社会」の実現に邁進

「障団連」／結成20周年進捗発揮のとき

北九州市障害福祉団体連絡協議会(障団連)  
会長 北原 守

今回は、北九州市障害福祉団体連絡協議会(以下障団連)の役割と北九州市差別解消条例について障団連の北原守会長に投稿していただきました。

自分らしく生きていける

「共生社会」とは

全ての人が人権を尊重され、自分らしく生きていける「共

予防できず、予防接種が唯一の対策と言われていますが、完全に予防するのは難しい状況です。

もし発熱やせき、鼻水など風邪のような症状が続く「はしか」かな



と思ったら、事前に医療機関に電話をして指示を仰ぎましょう。

示されました。

今回の大会は、午前の一部のみでの開催となりました。閉会直後に昼食の北九州折尾名物のかしわめし弁当を受け取り帰路につきました。天気はあいにくの雨ではありませんでしたが、盛況裡に終了しました。



北九州市障害福祉団体  
連絡協議会  
会長 北原 守氏

「共生社会」は、人類が追い求めてきた理想郷でもあります。二〇〇八年に国連で採択された障害者権利条約でその方向が打ち出され、日本では二〇〇九年から始まった障害者制度改革で具体化への取り組みがスタートしました。

共生のための場づくりは  
国民的な課題

それ以降、「共生社会」実現への活動は世界各地で

展開されるようになり、日本でも障害者基本法、障害者総合支援法、障害者差別解消法などの法整備が進められています。

そして今、共生のための場づくりは国民的な課題となつています。

「共生社会」とは、障害の有無を超え、全ての人が自分らしく生きていける社会です。

その実現には全ての人が「生きる力」を身に付けるとともに、生きていくことを困難にしている、仕組(制度)、構造物、風習、人の意識といった「社会の壁」を取り除いていかなければなりません。

そして、「生きる力」を身に付けるには、自己に内在する力をエンパワーメント(顕現化)するとともに、様々な「支援の力」が必要です。(裏面へつづく)







## 障害者差別解消で市民への啓発活動に全力

「共生社会」実現の牽引力に  
なっていくことを目指す

二〇一六年四月、障害者差別解消法が施行されました。

また、昨年十二月からは北九州市の障害者差別解消条例も施行されました。

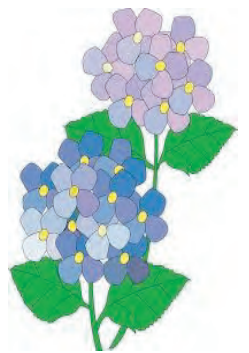
いずれも「共生社会」実現の牽引力になっていくことを目指しており、差別禁止が課される法の対象は行政機関と民間事業者となっています。

このうち、国の差別解消法では、行政機関に対しては、障害を理由とした不当な取り扱いによる差別の禁止と、

## 啓発活動に全力

障害のある人たちが等から求められた「社会的障壁」解消への合理的配慮は義務付けられています。民間事業者には対しては不当な差別は禁止としているものの、合理的配慮の提供は努力規定となっています。

一方、北九州市の差別解消条例も国の解消法を踏まえて、差別に対しては同様の措置が講じられることになっています。差別をめぐって当事者間で紛争が起きた場合には、独自に設けた第三者機関の「差別解消委員会」で解決に当たることになっています。



市条例の策定に当たって、「障団連」としては当事者団体の声を反映するとの考えから、一年前からプロジェクトチームを編成、先進自治体の条例づくりなどを調査するとともに、独自の条例案（素案）を作成して市障害福祉部等との話し合いを続けてきました。

議長からの決意が

条例制定への大きな力に

また、市議会とも連携し、正副議長や各党派との素案

（表面からのつづき）  
私たちが障害のある人たちの自立と社会参加を目指し、サービスの開発や「社会の壁」の除去（環境の整備）な



どに取り組んでいるものもここにあります。  
その上で、ここでいう「社会」とは、漠然とした「社会」ではありません。  
今、自分たちがいる「場」、すなわち、学校、職場、地域、それぞれの活動の場などが、そう、そうした「場」を足元から「共生の場」へと積み上げていくことが、大きくは「共生社会」の実現に繋がっていくことを確信しています。

「社会」の縮図は「地域」です。  
また、「共生の社会」とは「信頼の社会」でもあります。

私も一人一人が、地域の人たちとの交流、地域活動への参加、さらには地域への貢献活動等を、できることから地道に実行し、信頼関係を構築していくことが、共生の地域づくりに繋がっていくことを確信しています。

## 「共生社会」の建設こそ

## 障団連の使命

私どもの「障団連」は一九九八年四月に結成され、この四月で二十周年を迎えました。

発足以来、「小さな力を大きな力へ」をスローガンに、会員同士が力を合わせ、障害者施策の向上と地域との交流に力を注いできました。その使命は「共生社会」

の勉強会を実施しました。

その結果、議長からは「大きな条例だから、全会一致で可決されるよう努力したい」との決意が披露されるなど、条例制定への大きな力となりました。



障団連として市民への啓発活動を活発化

啓発活動を活発化

条例案は昨年十二月市議会でも可決され、施行されました。しかし、最も大事な民間事業者を含めた一般市民への周知はこれからです。

このため、「障団連」としては市当局とも協働で市民への啓発活動を活発化し、理解を求めていくことにしています。

の実現です。

折しも、「共生社会」実現への流れが大きくなりつつあり、「障団連」の真価が問われることになりました。

お互いに「全ての人、全ての力を受け入れ、共に前進する」との共生の思いをしっかりと胸に刻んで、前進して参りましょう。

編集後記  
てるてる坊主も、「雨」とセットで語られることが多いですね。

雑学的なことですが、てるてる坊主を逆さの状態で飾ると、明日の天気は雨になると言われています。

これを「ふれふれ坊主」や「あめあめ坊主」、「るてる坊主」などと呼ばれます。

「るてる坊主」とはなんだか可愛いですね。

逆さに吊す「るてる坊主」の反対だから、【るてるて】なんだろうね？

（インターネットより）

